やはり私が失声症なのは間違っている。

kaiza—

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は子供のころから言葉をうまく発することができない。

そのデメリットを抱えながらも、部活の依頼をこなし、日々の日常に精一杯生きていく私の物語。

目次

失声症 1
部活 4
入部 8
初めての部活 12
昼食 16
買い物 20
知り合い 24
友の励まし 29
告白という問題 33
病院 36
料理 40
逃げ道を作っていた私 43
雪ノ下さん 47

失声症

私の名前は山中　美波　一見どこにでもいるような普通の高校生だが、私には人と違うところが一つだけある。

私は子供のころから、しゃべることができない。

幼稚園の頃から、言葉がうまく出てこず、周りからはそれはまだ子供だから。

もう少し成長すれば、きっとしゃべれるようになるからと言われ、私もその言葉に納得してしまった。

しかし、時がたっても状況は変わらず、むしろ私の言葉はますます失われていく一方だった。

そんな状況に周りの大人たちは焦りを感じたのか、私を大きな病院に連れていき、いろんな検査を受けさせた。

数時間に及ぶ検査の結果、医者から出た言葉は娘さんは失声症にかかってる疑いが強いとのことだった。

失声症というのは、心因性の原因から起こる病気らしく、これとは違う形の失言症というものがあるらしいが、私の場合は脳のほうには異常はなく、言葉も聞き取ることができるから、失声症だろうとお医者さんは言っていた。

両親は私がそんな病気にかかっていることに絶望し、親戚たちは医者に具体的な解決方法を問い詰めていた。

具体的な治療方法は服薬、カウンセリング、発声練習とあるが、まだ幼かった私に服薬投与はリスクが高すぎると却下され、しばらくの間はカウンセリングと発声練習で様子を見ることになった。

そして、小学校の間は発声練習とその後のカウンセリングで声の状態を確認していき、中学生になってからは徐々に服薬も投与していった。

しかし、数年たった今も私の声は戻ることはなかった。

そして、高校の進学先を決めるとき、両親が私に尋ねてきた。美波は一般の学校に行きたい？それとも、福祉の整った学校に行きたいと尋ねてきた。

私はしばらく悩んだ後、筆談でこう返事を返した。
（普通の学校に行きたい）
両親はその返答に驚いていた。
「美波はほんとうにそれでいいのかい？お父さんたちのことを気にする必要はないんだよ」
お父さんが私にそう語りかける。隣ではお母さんが泣いていた。
しゃべれない私のせいで二人には苦労を掛けていることを私は知っている。
福祉の整った学校に行けば、周りとの差に苦しむこともないし、二人にも余計な心配を与えずに済む。
でも、それで私は本当にいいのだろうか。それは今の状況から逃げるということにならないか？
そう思うと、私は逃げたくないと思った。今は苦しいし、逃げ出したい思いもある。でも、世の中には私と同じ年代でもっと苦しい思いをしている人たちもいる。
幸いなことに私は言葉を発することができないだけで、それ以外の機能は問題ない。
（私は大丈夫だから。普通の学校に行く）
そして、私は高校の進学先を家の近くにある総武高校に決めた。
???
ある日の総武高校職員室にて
「どうですかな。先生。彼女の様子は？」
私は机の上で書類を整理していると、校長が尋ねてきた。
「彼女というと、山中さんのことですか？」
「はい。しゃべれないから、クラスで孤独に陥っていないか心配になりましてな」
山中さんは子供のころから失声症にかかり、言葉を発することができない。
それは山中さんの担任になった時に聞いたし、入学式の日の朝の職員室にて、山中さんにはある程度の配慮をもって接するようにと校長が全職員に告げていた。

「そんなことないですよ。クラスの子も山中さんのことは理解してますし、彼女なりにクラスになじもうとしてます」
「そうですか。それは安心しました」
「校長先生が山中さんのことを気にかける理由をお聞きしてもよろしいですか？」
　校長先生が一人の生徒のことをなぜこんなに気にかけるのか私は疑問に感じ、質問をすると。
「私の知り合いが同じ病気なんですよ。同じ境遇の人間が近くにいる身としてはほおっておけないという感じですね」
　なるほど……
「私は山中さんを見て、人と会話ができないということがこんなに辛いものだと初めて知りました」
「そうですね。我々はこうやって会話をし、意思を共有できているが、彼女はそれができない。自分の正しい意思を伝えることができない。時には相手に間違った考えをもたれてしまうこともあることでしょうね」
　山中さんが入学してから、私は一度だけ山中さんと面談した。
　彼女が苦しんでいないか、何かできることはないかという思いから面談という形をとった。
　面談の中で私が感じたことは、思った以上に山中さんは今の現状を受け入れている。前向きに生きていこうという強い思いを感じた。
（私は大丈夫ですよ。ありがとうございました）
　面談が終わった後、山中さんは小さな紙にそう書き記して、小さく笑いながら、教室を出て行った。
「いつか話せるようになるといいですね……山中さん」
「そうなるように、我々もサポートしていきましょう」
　リハビリと服薬で声を出すトレーニングはしていると山中さんは面談の時にいっていた。
　担任の私にできることは何だろう……今はそう考えることしかできなかった。

部活

総武高校に入学してから、一ヶ月が経過した、ある日の放課後のこと。

「♪♪」

私は音楽室にて一人でピアノを弾いていた。

昔から言葉をしゃべることができない私は、音楽や絵を描いたりといった一人でできる遊びを多くしていた。

中でも、すきなのは、気に入った音楽をプレーヤーで聞き、その曲の楽譜をネットで探し、そしてそれを記したものをピアノで演奏するといったものだ。

(演奏中は余計なことを考えなくてすむ。自分の短所を気にすることがない唯一の時間)

総武高校に入学して一ヶ月がたった。はじめのうちはしゃべれないことでクラスからはぶられると思っていたが、クラスメイトは私のことをはぶることなく、むしろ私に話しかけてくれたり、いろんなことを手伝ってくれている。

いつか言葉が話せるようになったら、皆には感謝しなければいけないなと思いながら、ピアノを弾いていると、音楽室の扉が開いた。

「失礼。君が山中　美波だな?」

入ってきたのは白衣を着た女性教師だった。

(はい。私が山中です)

ポケットからペンとメモを取り出して、私が山中ですと書き記して、渡した。

「私は二年の生活指導をしている平塚だ。一年の君は知らないだろう」

生徒指導の先生が私に何のようだろう?生活態度に問題はないと思うけど……

「君の演奏はとてもいいな。遠くからでも、心を引き寄せられるそんな感覚だったよ」

(あ、ありがとうございます……)

無意識で演奏しているときが多いので、他人にそう思われていることは知らなかったので、今の演奏をほめられたことに、私は素直にうれしかった。
「いっそのこと、演奏部にでも入ったらどうだ？」
（人前で演奏するのが苦手なので、無理です……）
私の場合はただ演奏をするのがすきというだけで、それを部活でやろうとは思わないし、人前で演奏するのはどうも苦手だ。
「そうか。ひとつの才能を磨くのもいいことだと私は思うけどな」
（無理なものは無理なので）
それにしても、さっきから感じるこの匂いは……もしかして、タバコかな？
（先生、もしかしてタバコすってきました？）
「確かにすってきたが、そんなにおいするか？」
（します）
教師って仕事に喫煙してもいいものなのだろうか。
「こ、こほん。演奏のことはいいとして、山中は部活を始める気はないのか？」
（私が入れる部活なんてたがが知れてます。入りたくても入れませんよ）
しゃべることができない私はどんな部活でも厄介者扱いされる。
会話ができないから、意思疎通ができない。他人からは、かわいそうな子という視線を送られる。私だって、普通の子なのに……。そう思うと、今の自分に嫌気がさす。
「奉仕部ならお前を受け入れてくれると思うぞ」
（奉仕部？）
「名前くらいは聞いたことあるだろ。生徒の依頼をかなえることを目的としている部活だ」
それなら聞いたことがある。でも、こんな私をあっさりと受け入れてくれるのだろうか……それが不安に感じる。
（それなら聞いたことあります。でも、私なんかが入っても大丈夫ですかね……）

「問題ない。私は奉仕部の顧問だからな」
　ええ!?この人が奉仕部の顧問なの!?これって、顧問自ら、私を勧誘しているってことになるよね。
（それって勧誘ですよね？）
「ああ。そうなんだが、強制はしないさ。君に関しては、強引なやり方は禁じられているからな」
（私だけ特別扱いみたいでなんかいやですね……）
　きっと先生たちにも私のことは広まってる。私だけは気を使え、壊れないように扱えっていう命令が出てるのだろうと思うと少しいやな気分になる。
「そんなことないさ。私は山中を普通の生徒と同じように扱いたいと思ってる」
（普通……）
「ああ。声が出せない。しゃべれないから、特別待遇って言うのはあまりに変だし、山中は普通の生徒と同じように、この学校に来ることを望み、そして同じ授業を受け、同じ生活している。そんな山中を私は誇りに思うし、だからこそ、病気を抱えた生徒ではなく、普通の生徒として扱いたい」
　今までそんなこと言ってくれる人はいなかった。皆が私を哀れんで、同情する。
　でも、私だってこれ以外は普通の子なんだ。特別扱いするのではなく、普通の子と同じように扱ってほしいと思ってきた。
　この先生は私を普通のことして見てくれてる。病気で声が出せないかわいそうな生徒ではなく、あくまで一般生徒と同じ視点で接してくれる。一人の先生がそう見てくれるだけで私としてはすごくうれしかった。
（わかりました。考えてみます）
「ああ。念のためにいうが、あくまで強制はしない。山中がきたいとおもったらきたまえ」
　今まで部活なんてしたことなかったけど、この機会にはじめてみるのもいいかもしれない。先生の表情を見ながら、私はそんなことを

思った。

入部

音楽室で平塚先生と話した後、私は職員室に音楽室の鍵を返しに行ったあと、そのまま下校した。

（ただいま）

私の両親は共働きで帰りはいつも遅い。これは私が子供のころから変わらないことで、私の病気とは関係ないらしい。

「いつも帰りが遅くてごめんね」

「何か辛いことがあったらいつでも話していいんだぞ。私たちは美波の味方だ」

二人が家に帰るころはいつも遅い時間。その時間帯にいつも寝ている私の様子を見に、両親は私の部屋を訪れ、ただいまという言葉を残していく。

（部活をはじめるっていったら、どんな顔するかな……）

私が部活をやることに驚くかな、それとも応援してくれるかな……

私はリビングのソファーに寝転がりながら、携帯の音楽アプリを起動させた。

（悩んだり、迷ったりしたときはいつも音楽を聴くようにしてるんだよね）

私はイヤホンを耳にさし、音楽アプリにあるものを適当に再生する。

その日は寝る前に両親に部活に入ることにしましたというラインを送った。

翌朝、起きてから携帯を確認すると、両親からラインの返事が返ってきていた。

お父さんからは「頑張れ。何かあったら、いつでも相談に乗るからな」

お母さんからは「音楽に関係するものをやるの？またどんな部活なのかを教えてね。美波の決めたことなら、お母さんは全力で応援するよ」

それぞれのラインにありがとう！という言葉とキャラクターのス

タンプを送信した。
そして、ＨＲ前に私は職員室にて、平塚先生に入部届けを提出した。
「確かに受け取った。さっそくだが、今日から部活にでてもらってもいいか？」
（今日ですか……）
今日は施設に行く予定がある。別の日に変えることもできるけど……どうしようかな。
「何か用事でもあるのか？」
（今日はお世話になってる施設にいくので……明日は大丈夫です）
私が通っているのは私と同じく生まれつきの病気や何かしらの障害を抱えた子供たちがすごしている施設だ。
私は週に一回、そこに通っており、今日はその日だった。
「そうか。それなら強要することはできないな。昨日もいったが、自分がこれると思った日に顔を出してくれればいいからな」
平塚先生の態度は用事なら仕方ないという感じだった。
（わかりました。ありがとうございます）
私は平塚先生に軽く頭を下げてから、職員室を退室した。
＊＊＊
山中が職員室を退室してから、山中が持ってきた入部届けを見ていると、あいつのクラスの担任がやってきた。
「平塚先生……それは何ですか？」
「これですか？山中の奉仕部への入部届けですけど」
担任に入部届けを見せると、驚愕していた。
「こんなこと……私は聞いてない」
「話す必要がないと思ったんでしょうね。昨日話して、そして翌日に入部届けを持ってきたということは本人の心は決まっていたということです」
部活に入ることを相談するほど、山中も子供じゃないし、それくらいの判断は自分でするということだろう。
「わかってるんですか！山中さんを部活に入れることがどれだけのリスクを伴うか！」

「わかってます。だから、私は強要してません。それでも、入部したいと思ったのは本人の強い意志の表れだと私は思います」
「奉仕部って、平塚先生の顧問の部活ですよね。まさか……勧誘したんじゃ」
「声はかけましたよ。なかなか興味深い子なので」
　私はそういって嘲笑すると、担任は信じられないといっていた。
「山中さんは話せないんですよ。部活に入れずに、あくまで生活面でサポートする。それが私たちのすることじゃないですか？」
「そうですか。では山中が成長できなくてもそれでいいと？」
「成長とかの話じゃありません。部活をすることによって、山中さんに何かあったらどうするつもりですか？」
「ではあくまで現状維持でいくということですか？」
「そうです。それが私たちにとっても、山中さんにとってもいいことだと思いますから」
　この担任はどこか間違っている。生徒の成長を促すこともせず、ただ現状を望み、変化が起こそうとするとこうやって騒ぎ立てる。
「山中は先生が思っている以上に前を向いてますよ」
「なんですって？」
「昨日、本人と話して気づきました。山中は現状に悲観することなく、前を向いている。そして本人は気づいていないかもだが、変化を求めてる。それが今なんです」
　昨日の山中の弾いていた曲が有名な歌手のもので、その曲に当てた意味が自らの変化と成長にあてたものであると私は知っていた。
　比企谷、雪ノ下、由比ヶ浜。奉仕部には３人の部員がいる。
　協調性のない比企谷、雪ノ下を協調性もあり、若干だが行動力のある由比ヶ浜が支えている。
　このまま３人でいくのもいいのだが、この３人は私が知らない何かを抱えている。
　何かのきっかけでそれが崩壊し、３人がバラバラになる危険性もあった。
「変化を求めてるといっても、何も奉仕部に入れなくても……」

「ではこの学校内で変化を求めている山中を受け入れてくれるところがあると思いますか？」
私の問いに担任は口を噤む。
ほかの場所では間違いなく山中の居場所はないことはここにいる全員が理解している。
「今のクラスでは山中の居場所はあるかもしれない。でも、それは来年になったら消えてしまうかもしれない」
「そんなこと……」
「ないとはいいきれませんよね。でも、奉仕部なら、山中の居場所を作ってあげられる。山中の変化を促進することもできる。何より、私はそんな生徒の成長を見守りたい」
山中はあの3人と性格や考え方も違う。
「そうですか……でも、私は絶対に認めませんからね。そんな変な部活で変化を求めるより、きっとほかにいいほうがあるはずなんです」
担任は明らかに私に敵意を向けている。大事な教え子をとられたそんな気分なのだろう。
だが、いい方法があるなら、何で行動できないのか。私はそれを疑問に感じずにはいられなかった。

初めての部活

そして翌日の放課後のこと。私は読みかけの本を鞄にしまうと、部活に向かうため、荷物をまとめ、教室を出た。
そして特別棟の近くで待っていた平塚先生と合流した。
「緊張してるか？」
（少しですね）
「そう硬くなることはない。お前のことはあいつらに話してある」
昨日の朝に入部届けを出したから、放課後の部活内で話したのかな。
平塚先生に案内されて、ある教室の前についた。
「邪魔するぞ」
平塚先生はノックもせずにずかずかと教室の中に入っていった。
私は遅れながらも、平塚先生の後を着いて教室に入った。
「平塚先生……ノックをって……」
教室の中にはこの学校の有名人であり、上級生にも、下級生にもその名が知られている、雪ノ下　雪乃先輩がいた。
「平塚先生、もしかしてその後ろにいる子が昨日話してた子ですか？」
その隣に座っているのは、短い髪を染め、お団子に括っている人がいた。
「ああ。こいつが新入部員であり、一年の山中　美波だ」
平塚先生の言葉の後に私は小さくお辞儀をした。
「昨日も話したとおり、こいつは病気でしゃべることができない」
「じゃあ、どうやってコミュニケーションをとればいいですか？」
雪ノ下先輩の隣に座っている人に質問されたので、私は手持ちのメモに短く言葉を書き込んで渡した。
（こうやって筆談で返すことができるので、コミュニケーションは大丈夫だと思います）
「そうなんだ。私の自己紹介をするね。二年の由比ヶ浜　結衣だよ。よろしくね。美波ちゃん」
（よろしくお願いします。由比ヶ浜先輩）

「私は二年の雪ノ下　雪乃よ」
（よろしくお願いします。雪ノ下先輩）
　それにしても、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩から離れた所に座っている男性は誰なんだろう。
「ほら、ヒッキーも挨拶しなよ！」
「もしかして、見慣れない女子が来たから、興奮して言葉が出ないのかしら？キモ谷君」
「そうなの!?ヒッキーまじキモイ！」
「ちげぇよ……こいつをどっかで見たことあると思っただけだ」
　男性は読んでいる本から顔を上げると、まるで死人のような目を私にむけてきた。
（わ、わ、わたしはあったことないです……ひ、ひ、ひと違いだと思います）
　男性の死んでいるか、生きているか、わからない、その腐った目に私はすっかり恐怖していた。
「ほら。あなたを見ておびえてるじゃない。その腐った目で後輩をおびえさせるのはやめなさい。ゾンビ谷君」
「そうだよ！書いてるとき、美波ちゃんの手が震えてたし！」
「俺は●●●●ぐらし！に出てくるゾンビかよ……二年の比企谷　八幡だ」
　比企谷という名前に私は聞き覚えがない。通っていた病院が一緒とかかな、でもそれだと私も覚えてるはずだし……
（別人じゃないですかね。わたしはあったことないですし）
「俺もそう思うことにするわ。さっきのことは忘れてくれ」
　比企谷先輩はそういって私から視線を離し、再び本に視線を戻していた。
　平塚先生はというと、じゃあ後は頼んだぞーといって部室から出て行った。
「あなたの趣味について聞いてもいいかしら？」
（趣味ですか？）
「何でもいいよ。料理がすきとか、ヒッキーやゆきのんみたいに読書

がすきでもいいし」
「由比ヶ浜さんが料理が趣味とか言い出したら、明日はきっと雨ね」
「いや、大雪だろ」
「二人の言葉がひどい!?私だって練習してるのにー!」
　3人の先輩のやり取りを見て、私はとても趣味が料理ですとは言い出せない空気になっているのを感じたので、別の趣味を話すことにした。
（音楽を聞いたり、絵を書くことです）
「音楽ってどんなのを聞くの？」
（昔の演歌や最近のものまでいろいろです。その時の気分によって変えてます）
「演歌ってしぶいね…」
　そうなのかな？最近の人って演歌って聞かないの？曲によっては神だと思うものもあるのに。
「絵はどんなものを描いたりするのかしら？」
（パソコンのソフトで動物を書いたり、窓から見える風景を書いたりしてます）
「パソコンってそんなことできるんだ！こんど教えて！」
（いいですよ）
　簡単なものなら教えることはできるだろう。
「昨日から、どうしても聞きたかったことがあるのだけど、聞いてもいいかしら？」
（いいですよ）
「あなたは今の自分をどう思ってるの？」
　今の自分をどう思っているか…。雪ノ下先輩の質問は私は日々思い続けてることを同じものだった。
（そうですね。勉学が普通、容姿も普通。趣味も普通の人とは変わらない。なのに、私は病気のせいでしゃべることができない。普通の人を見て思うのが、何で私はこんなにも普通の人とは違って見られるのだろう……ともうこのことを考えるたびに、今の自分に絶望感を感じてました）

雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩は私の返した言葉に息を呑み、本を読んでいた比企谷先輩もこちらを見ていた。
（でも、そのことで逃げ道を作るのはやめようって思うんです）
「それはなぜかしら？」
（世の中には私以上につらい思いをしている人も沢山います。私以上に重い病気や重い障害を持ち、体を自由に動かせない人。その人たちに比べると私はしゃべることができないだけで、体は普通に動かせます。だから、しゃべれないことで他人より楽な道を選ぶのはやめようって思うんです）
よくＴＶや雑誌の特集でそういう人たちの生活を見る機会があるが、その人たちを見るたびに思うように体を動かせないこの人たちより、今の普通の生活ができている私は恵まれている。
だから、恵まれている自分がその人たちと同じように弱音を吐き、他人に泣きつくようなことは絶対にしないと心に誓っている。
「そう…少なくともそこの男よりはまともそうで安心したわ」
「おい。何で俺が比較対象になるんだよ」
「美波ちゃん、ヒッキーみたいになっちゃだめだよ」
（あはは…）
３人の先輩たちのやり取りを見て、私は苦笑を返した。

昼食

私が奉仕部に入部してから数日が経過した。
ある日の昼休みでのこと、私は購買でパンと飲み物を買い、教室に戻る途中だった。
（今日は買えてよかった）
購買はいつも昼休みになると、大勢の人でにぎわう為、早めにいっておかないと自分の目的のパンがなくなっているということがある。
今日の昼食はチョコパンとアンパン。それだけで足りるのかと聞かれそうだけど、もともとそんなに食べるタイプではないので、これくらいで充分なのである。
私はパンを持って教室に戻ろうと思ったが、先日のやり取りがふと頭の中をよぎっていった。
「山中さん。今日も少ない。だめだよ！もっと食べないと」
その日も今日と同じで調理パン二つと飲み物だけだった。
（充分足りるけど）
「でも、見た感じ、毎日お昼パンだよね？」
（この前、お弁当箱が壊れちゃって、新しいのが手に入るまでの期間限定）
私は中学まではお昼ごはんは毎日自分で作っていた。
高校でもそうしようと思った矢先に愛用のお弁当箱がこわれてしまった。
親にそのことを相談すると、新しいものを買うまでは購買で買ってくれと頼まれた。
「でも、それだと栄養が偏るから」
その子はそういって、好きなおかずを一つ選んで持っていいよといって、自分のお弁当を差し出した。
（なんか悪いからいいよ）
基本小食の私は普段からあまり食べない。おかず一つでそこまでおなかがいっぱいになるとは思わないが、せっかく買ってきたパンがそれで無駄になるのだけは避けたかった。

「あ！ずるい。私のもあげる」
「それだけだと少ないって！もっと食べないと倒れちゃうよ！」
一人がそういうと、周りの子も連鎖するように、私の周りに集まってきた。
私はお供えをするお地蔵さんかと突っ込みを入れたくなるような状況だった。
それからは本当に大丈夫だからといって、一人一人に断りを入れて、私は買ってきたパンだけを食べた。
（中庭で食べようかな……）
またこの前のような、騒動になるとこの先が困ると思い、私は教室に向かう気持ちを中庭へと方向変換させ、おそらくは人が少ないと見られる中庭に向かった。
「おっす……」
中庭には先客がいた。私はそのお客さんにぺこりと小さく頭を下げながら、中庭に入った。
（こんにちは。比企谷先輩）
そのお客が誰かというと、この前、部活で出会った比企谷　先輩だった。
（あいてる所に座ってもいいですか？）
「あ、ああ」
私は中庭の開いているスペースに腰を下ろし、買ってきたアンパンの袋をあけた。
（比企谷先輩はいつもここでお昼を食べているんですか？）
「ああ。ここは俺のベストプレイスだからな」
（天気が悪いときはどうしてるんですか？）
「その時は教室で食ってる」
それなら、いつも教室で食べたらいいのにと少しだけ思ったが、私はそれを口にすることはしなかった。
（比企谷先輩は……その、ボッチなんですよね？）
「ああ。ボッチはいいぞ。周りに気を使う必要もないし、自分が孤独でいることに誇りさえ感じる」

（そこは誇っていいんでしょうか……）
　小学校のころは仲のいい友達がおらず、私は比企谷先輩と同じように決まった場所でお昼を食べていた。
「お前は普段はどこで食べてるんだ？」
（私は教室で食べてます）
「じゃあ、何で今日はここに来てるんだよ。普段どおり教室で食べればいいだろ」
（いろいろありまして……今日はここで食べようと思ったんです）
　まさか、自分がお地蔵さんのように、皆から食べ物を提供されるから。それがいやだから、ここで食べることにしたんですとは少しだけいいづらかった。
「いろいろってはぶられてるってことか？」
（いいえ。別の理由です）
「ふーん。まぁあまり勘ぐるのはやめておくわ」
　比企谷先輩はそういって買ってきたと見られるパンを食べていた。
（比企谷先輩は何で奉仕部に入部したんですか？）
「俺は強制入部。あの顧問によってな」
（まじですか？）
「まじだよ。退部しようとするとラストブリットが待ってるからな」
　ラストブリットって何だろう？それより、強制入部って高校でやっても大丈夫なのだろうか。なんだが、そっちのほうが心配になる。
　それからは話すことがなくなってしまい、何を話題に出したらいいかわからず、お互いに無言でパンを食べ続ける。
（ごちそうさまでした）
　そうしている間に買って来たパン二つを食べ終えた。
「早いな」
（量が少ないですからね。小さいタイプですし）
「それだけで足りるのか？」
（足りますよ。もともとが小食ですし）
　空になったパンの袋をその場に置いてから、私は立ち上がり、服についている砂を片手で払った。

（マッカンっておいしいですか？）
「ああ。近い将来千葉県民は毎食これを飲むだろうな」
（なら、千葉県民として買わないとだめですね）
お父さんもよく飲んでいるのを見かけるけど、そんなにおいしいなら、今度かってみようかな。
（今日は話せてよかったです。また、ここにお邪魔してもいいですか？）
全ての砂を払いのけると、私は先輩に遠慮気味に聞いた。
「それは俺が決めることじゃないだろ」
比企谷先輩のぶっきらぼうなその言葉はまるで来たかったらまたこればいいといっているように感じた。

買い物

季節は6月。時期は梅雨真っ只中ということもあり、晴れている日でもじめじめしている天気が続いていた。

（こんにちは）

私は通いなれ始めた空き教室の扉を開いた。中には雪ノ下先輩と比企谷先輩の二人だけで、由比ヶ浜先輩の姿はなかった。

「あら、こんにちは」

「うっす」

二人の先輩は中に入ってきた私にそういうと、再び読書の世界に入っていった。

読書している先輩たちの本を見て、読書してる人ってかっこよく見られるかなと思ってしまい、先日、学校帰りに本屋で本を購入した。

鞄から買った本を取り出して、読み始めた。

ちなみに私がどんな本を読んでいるかというと、バッテリーという青春野球小説だ。

最近アニメ化したらしく、どんなものか気になり、物語を知るためにはまずは原作を読んでみようと思い、一巻から4巻までを購入した。

（しまった……まったく内容が入ってこない）

私は元々読書家ではないので、部活の沈黙の空気のほうが気になってしまい、読んでいる本の内容が全く頭に入ってこない。

「あの……ちょっといいかしら」

ずっとそわそわしているのが気になったのか、雪ノ下先輩が話しかけてきた。

（何ですか？）

「もうすぐ、由比ヶ浜さんの誕生日なの。それで買い物に付き合ってほしいのだけど」

「それは俺にも言ってるのか？」

「当然じゃない。比企谷君」

友達のプレゼントのための買い物か。

（別にいいですよ）
「山中がいくなら俺はいかなくてもいいよな？」
「だめよ。私の感性は山中さんのような一般の女子高生とはかけ離れているのよ。それにあなたも形だけなら部員でしょ。ついてきなさい」
　私の感性って一般の女子高生と同じなのだろうか。若干不安になってきた。
（女性だけだと、どれを選んだらいいかわからないですから。男性がいてくれると意見も聞けるから、すごい助かると思います）
　雪ノ下先輩の上から目線の言葉に私はさりげなくフェローの言葉を付け加えた。
「まぁ……それならいいか。いつが由比ヶ浜の誕生日なんだ？」
「６月１８日よ」
　あ……私の誕生日と近い。もう少し早く出会っていれば、私も祝ってもらえたのかな。
（それなら、今週の休日に行ったほうがいいですね）
「そうね。場所はらぽーとでいいかしら？」
「そこでいいだろ。行くのは日曜日でいいか？」
　日曜日は特に用事もなかったし、家に一日いるより出かけたほうが気分的にいいかもしれない。
（大丈夫です）
「私もその日でかまわないわ」
　こうして、日曜日に奉仕部のメンバーで由比ヶ浜先輩の誕生日プレゼントを買いに行くことになった。

　そして当日。私は事前に決めていた待ち合わせ場所に五分前に到着した。
（こんにちは）
　待ち合わせ場所の近くにあるベンチに腰を下ろして、雪ノ下先輩は本を読んでいた。
「え？あ、ああ。山中さんきたのね」

私のきていたことに気づいてなかったのか、私が挨拶すると、雪ノ下先輩は少し驚いていた。
（ごめんなさい。驚かせちゃいましたか？）
「あなたが来ていることに気づかなかった私が悪いから、気にしないでいいわ」
普通の人なら気軽にしてる挨拶。それが私にはできない。
そう思うと、自分の心に暗い影が差す。
「うーす」
その言葉と共に、比企谷先輩がやってきた。隣には見慣れない女の子が一緒にいる。
「こんにちは！比企谷　小町です。山中さんのことは兄から聞いてますのでご安心ください！」
どうやら、比企谷先輩の隣にいた女の子は先輩の妹さんのようだ。
「ごめんなさいね。休日につき合わせてしまって」
「いえいえ。小町も結衣さんの誕生日プレゼント買いたいですし、山中さんと雪乃さんとのお出かけは楽しみですし」
小町さんは比企谷先輩とは間逆のようですごく明るい子という印象だった。
「よし。効率重視でいこう。俺はこっちを回る」
「じゃあ、私はこっちを回るわ」
比企谷先輩と雪ノ下先輩はそれぞれに違う場所を指差していた。
（それじゃあ……私はこっちを）
「ストップです」
小町さんは比企谷先輩の提案を却下し、皆でまわそうと提案し、小町さんの示したポイントまで４人でいくことになった。
ららぽーとは休日ともあって、多くの人で賑わいを見せていた。
「あれ、小町は？」
（さっき、向こうの方に歩いていったのを見かけましたけど）
「あいつ、皆で回りましょうっていったのに、なにやってんだよ……」
（まぁまぁ……ここは３人で回りませんか？各自でバラバラのものを買うよりはこっちのほうがいいと思いますし）

「そうだな。ところで雪ノ下は何してるんだ？」
　雪ノ下先輩は人気キャラクターのパンさんのぬいぐるみを触っていた。
「小町さん、どうしたって？」
「何か買いたいものがあるらしい。それで丸投げされた」
「そもそも休日につき合わせているのだし、文句のいえた義理でもないわね。後は私たちでなんとかしましょう」
（そうですね）
　そして、雪ノ下先輩はさきほど触れていた、小さいタイプのパンさんのぬいぐるみを購入した後、３人でフロア内を回ることになった。

知り合い

私たちは3人でいろんなお店を回っていた。
（それにしても、女性が多いですね）
「ああ。俺ってそんな不審者に見えるか？」
私たちがいるエリアには女性客が多く、男性客の割合は少ないため、比企谷先輩は周囲の人から不審者のような視線を向けられていた。
（女性客が多いから、そのせいじゃないですかね。あまり気にしないほうがいいと思いますよ）
「そうだと思いたいが、ところで雪ノ下は何をやっているんだ？」
私は雪ノ下先輩のほうを向くと、先輩はなぜか手に取った洋服を引っ張っていた。
（耐久性を調べるんですかね？）
「何で服に防御力を求めるのかねぇ……」
確かにそんなものもとめる必要はないと思うけど…。
（洋服より、あっちのお店にあるもののほうが喜びそうだと思いますけどね）
「あっちって？」
（あのお店です）
私が指差した方向にはかわいいエプロンが何着もおいてあるお店があった。
「何でエプロンなんだ？」
（ほら。由比ヶ浜先輩、料理を練習してるって言ってたじゃないですか。家で練習するにせよ、エプロンがあれば服が汚れずにすみますし）
前に由比ヶ浜先輩と話したとき、料理を練習していると話していたのを私は思い出した。
一度だけ作ってもらったのだが、見た目も味もすごかった。（悪い意味で）
「なるほどな。じゃあ、あそこで格闘してる雪ノ下を呼ぶか」

（そうですね）
　雪ノ下先輩はいまだに服を引っ張っており、そろそろお店の人から注意されそうだったので、別のお店にいきますといって、服を元の場所に戻し、その場から強引に移動させた。
「どうかしら？」
　エプロンの置いているお店に移動すると、雪ノ下先輩はその中の一つのエプロンを身に着けた。
「どうっていわれても、すげぇ似合ってるとしか」
（そうですね。違和感なしです）
　エプロンの柄は黒い生地を基調とし、デザインは猫のようだ。
「そう。ありがとう。けれど、私のことではなく、由比ヶ浜さんにどうかしらという意味よ」
　あれを由比ヶ浜先輩にだと……似合わないと思う。
「由比ヶ浜はなんかもっとふわふわポワポワした頭の悪そうな物のほうが喜ぶんじゃないの」
「ひどい言い草だけど、的確だから反応に困るわね…」
　雪ノ下先輩はピンクをメインとした物を選んだ。
　それと先ほど試着していたエプロンも買うことにしたらしく、一緒に会計まで持っていった。
　私と比企谷先輩は雪ノ下先輩が会計が終わるまで待っていると。
「あれ？雪乃ちゃんだ」
　お店の外から、雪ノ下先輩と少し似ている女性がこちらに話しかけてきた。
「姉さん…」
　あ。お姉さんなんだ。どおりで似ているわけだ
「美波じゃん、こんなところで何してるの？」
　雪ノ下さんのお姉さんの隣には知り合いの女性がいた。
（部活の先輩の誕生日プレゼントの買い物にきたんですよ。田上さん）
　目の前の女性にこの場所にいる目的を伝えるとふーんとちいさくいい。

「誰だ？」
（知り合いです）
　小声で比企谷先輩が聞いてきたので、私はそう返した。
「悪いんだけど、美波をかりてもいい？」
「別に俺はかまわないですけど…」
「ありがと」
「なるほどね、その子が山中ちゃん。いつも悠ちゃんが話してる子なんだね」
「うん。ごめんね、陽乃。休日に買い物に付き合ってもらったのに」
「別にかまわないよ。それに埋め合わせならいくらでもできそうだからね」
「ありがと。それじゃあ、いこうか。美波」
　田上さんはそういうと、私の手を引っ張り、近くのハンバーガーショップへと連れて行った。
（急にどうしたんですか？）
「いやいや。久しぶりに会ったんだから、少し話がしたいなーって思って」
　田上さんとは小さいころからの知り合いだった。昔から周りのことなんて、考えずに行動するものだから、付き合わされるほうとしてはすごく大変だった。
（そうですか…大学はどうですか？）
「うん。楽しいよ。いい友達もできたし、自分の好きなことをやれてるから、最高の気分」
　さいですか…。こんなところにまで連れ出して自慢かよ…と私は憂鬱な気分になった。
「それにしても、驚いたな。美波が人にプレゼントをあげるなんて」
（部活の先輩の誕生日だからですよ）
「そうじゃなくて、美波はほら、人に気持ちを伝えられないじゃない」
　そんなことは……といいかけたが、私はその言葉を伝えずに心の奥にしまった。
　私は言葉が話せない。筆談で言葉を伝えても、意思は伝えられな

い。だから感情も理解されない。
　そんなことはもちろんわかってる。それでも、私はこのやり方でしかない。
（私にはこの方法しかありませんから）
「そうだね。私の誕生日の時はカードを添えてくれただけだったもんね」
　この時は感謝していたじゃないか。何で今になって、本当は感謝なんかしてないよといわんばかりのことをいうのだろうか。
（何がいいたいんですか？）
「美波は本当にこのままでいいと思ってる？」
（このままって……直るように精一杯やってるつもりですけど）
　私が反感を持ちながら、そう返すと、田上さんは違う、違うと首をふった。
「美波はきっとこのままいくと孤独になる。小学校の時や中学校の時よりももっとひどい形になる。私にはそれがわかるんだ」
（何でですか？）
「長い付き合いからくる感ってやつかな。それにさ、最近私の夢によく美波が出てくるんだ」
　何で私が、田上さんの夢の中に出てくるんだ。夢の中に他人が出てくるということはよく聞くが、その時の私は今よりもひどいんだろうか。
（その時の私は今よりひどいんですか？）
「うん。その時の美波はね、とても悲しそうな表情でいるんだ。誰かと話していても心はそこにない、ただいるだけっていう、そんな感じなんだよね」
　それはまるで他人とのかかわりを遮断しているように感じた。
（昔から田上さんのいうことはよく外れるのであまり気にしないことにします）
「そうだね。今のことは、私の独り言だと思ってくれていいかな。ただ、少し不安だったから、直接美波に話したかっただけだしね」
　夢の中の私はどんな思いをしていたのだろう。孤独に陥ったとい

うことは今よりももっとひどい状態になるのかとそう思うと、私は先の未来に不安を感じていた。

友の励まし

結局、その後、私は先輩たちに具合が悪くなったので先に帰りますというメールを送り、家に帰った。

（せっかくの休日が無駄になっちゃったな…）

何であそこで田上さんに会うかな……私。今日の占いの相性が最悪だったことと何か関係があるのかと……自分にとって都合のいい言い訳ばかりを並べる。

（はぁ……私って本当に何のためにここにいるんだろ）

何で私はこんな目にあっているのだろう。人生の中で悪いことをした記憶はないし、されたこともない。

なのに、どうしてこんなにも辛い気持ちになるのだろう。

（途中で帰っちゃったし……これで部活にも顔が出さないな）

田上さんの話が終わった後、すぐに先輩たちと合流するということもできた。

でも、私はそれをしなかった。あのことを聞いてからは、私の心は恐怖で支配され、先輩たちの輪に加わるのを避けてしまった。

（これからどんな顔をして会えばいいのだろうか…）

気持ちの伝え方も不器用であれば、考え方もうまくできない。ほんと、私って不器用すぎる。

そう思うと、誰もいない家の自室のベットにて、泣き始めた。

しばらく泣いた後、私は泣き疲れてしまったのか、そのまま布団の中で寝てしまっていた。

家に帰った来た時刻が午後の４時で起きた時間が夜６時なので、およそ２時間くらい寝ていたことになる。

（もう夜か……）

私は布団から起き上がると、あたりが暗く、部屋の電気をつけるのが面倒だったので、手元にあった携帯の光で普段からかけているメガネを探そうと思い、携帯を手に取ると。

（メールがきてる……）

携帯には１通のメールが受信されていた。発信者は中学校の時の

友人からだった。
友人「今、時間ある？」
送られてきた時刻を確認すると、夕方の５時半ということは３０分前にこのメールが送られてきたということになる。
（時間はあるけど…）
この後にやることといえば、晩御飯の支度と明日の用意だけだ。
その後はフリーとなっているため、特に時間の縛りなどもない。
私（あいてるよ）
そう短く打ってメールを返すと、すぐに返信が帰ってきた。
友人（今からいくから）
え!?今から来るの！ど、どうしよう……まだ何もしたくできてない。
まずは、お米を精米機に入れて、それからお風呂のスイッチを入れて、二十分くらいしたら、精米が終わるから、そのお米を今度を炊飯器にいれてって……これは普段やっていることじゃん！
寝起きで寝ぼけている私の頭は状況を整理することができず、普段やっている行動の支度のことを連想させていた。
そうこうしている間に家のチャイムがなった。
メールの返信からまだそれほど時間はたってない。別の人が来たのだろうと私はチャイムに出ると。
「私よ。いますぐあけなさい」
友人だったー！それにしても、来るのはやすぎませんかね!?
しかも相変わらずの上から目線の態度なので、私は若干いらっとしながらも、家のドアを空けた。
「遅いわよ。私があけろといったら、五分以内にあけなさい」
突然押しかけてきて、この偉そうな態度である。
（いや、来るならくるって早めにいってよ。ハル）
目の前の友人の名前は大城　ハル。私とは小、中と同じ学校で過ごし、中学校を卒業するまで同じクラスという関係だった。
「いいじゃない。どうせ暇だったんでしょ？」
（暇だったけどさ…来るなら、それなりの支度もしたのに）

「だから連絡したじゃない。３０分前に」
　その時間は寝てました。だから来るならもっと早くに連絡くださいとこの友人に言いたかったが、あんたが寝てるのが悪いのよと返されるのが落ちなので、心の隅にしまっておいた。
（それでどうしたの？）
「あんたが死んだ目でいるって聞いたから、様子を見に来たのよ」
　私が死んだ目？そんな目をしていたという自覚はないのだが。
（誰から聞いたの？）
「咲からよ。あの子があんたを町で見かけた時、死んだような目で歩いていたから、何かあったんじゃないかって私に相談してきたのよ」
　そうだったんだ。
「今でも泣いた跡あるじゃない」
（わかるの？）
「そりゃ、わかるわよ」
　これも長年の付き合いの長さからわかるものなのだろう。
（今日、私って、ほんと何もできないんだなっていうのが改めてわかった）
　さっきまで泣いてた理由をハルに向けていうと、私はまた涙があふれてきそうになった。
「なら、これからできることを見つけていけばいいじゃない」
（え？）
「確かにあんたは言葉はしゃべれないし、人の気持ちはうまく読み取れないかもしれないし、うまく伝えられないかもしれない。でも、何もできないわけじゃないでしょ」
（ハル……）
「全く、あんたは前から思ってたけど、何でも一人で抱えこみすぎ。もう少し周りを頼ってもいい立場なんだからね」
　今の私にできることがあるのだろうか。
「ほら。また暗くなってる。いまから晩御飯を作るんでしょ？」
（うん。用意はしようと思ってるけど）
「なら、手伝うわよ。久しぶりに美波の作ったご飯を食べたいからね」

（もしかして、それが本当の目的かな？）
「ち、ちがうわよ！私はほんとにあんたのことを心配して！」
（その割にはおなかの虫は正直だね）
ハルのお腹は小さくなっていた。恐らくはお腹がすいたよーという合図なのだろう。
「ほら。早く支度するわよ！時間は限られているんだからね！」
（何で上から目線かのかなぁ…。それにここは私の家なんだけどね）
友人の家でもお構いなしに上から目線の友人に私は頬が緩む。
今の私は何もできない無力な人かもしれない。でも、そんな私を気にかけてくれる友達がいる。それだけで今の私にはとても幸せなことだった。

告白という問題

先日までのじめじめとした梅雨をすぎ、夏本番の暑さがじわりじわりと迫っていた。
私はあの日以来、部活に足を運ぶ日が減っていた。
あの日、途中で帰ってしまったことからして、どんな顔をして会えばいいのか、どんな謝罪をすればいいのか。それがまだ見つからなかった。
部活に顔を出しては、何もせずただ本を読んでいる。それの繰り返しだった。
（今のままじゃだめだよね……）
自分の頭でも、今の状況は変えなければならない。そう理解している。
ただ、人間は時として理解できているとした状況でも、いろいろな理由を並べては中々行動に移せないという難しい生き物なんだ。
気持ちが前に向かないことには、どう行動してもだめな結果に終わることは今までの経験上で理解できていた。
それに今の私は別の問題を抱えていた。

そんなある日のこと、いつものように私は校舎裏に来ていた。
私の片手には手紙のような物が握られており、目の前には男子がいる。
「好きです！付き合ってください」
これはそう、告白というやつだ。相手は野球部に所属しているという先輩。一年の私とはあったこともなければ、話したこともない。
（ごめんなさい。今は誰とも付き合う気はないんです）
今月はこれで3件目。相手が全て上級生ということで断り方に気を使わなければならいので、すごく疲れるんだ。
私はしゃべることができない。それでも男子から見たらポイントは高いらしく、一部ではロスト・エンジェルと呼ばれているらしい。
意味は言葉を失ったかわいい天使らしい。そのネーミングつけた

人を見つけ次第、張り倒してやりたいと私は思う。
「で、でも！君は話せないんだろ。俺みたいなやつがいるといろいろと助かるんじゃないか？」
（ごめんなさい。私は通訳者は求めてませんので…）
　別に私は通訳者を求めてないし、求めるつもりもない。
「くっ……今はということは、後ならいいってことだよな？」
（それはわかりません）
　気持ちの変化が見られたら即アタックするってことかよ……
　日曜の夕方にやっている某国民的アニメのキートン●●さんのようにこの男性は相手の迷惑を考えないのだろうかというアナウンスをいれてほしい。
「今はあきらめる。ただ、君の変化が起こったときは必ず……」
　先輩は去り際にアニメや漫画でよくある、開始十秒で倒される雑魚キャラのようなせりふを残していった。
（ふぅ…）
　私は男性が去ってから、自販機でお茶を買い、それを飲みながら一息ついた。
（気持ちの変化って人間そう簡単に気持ちが変えられたら誰も苦労しないとおもうんだけどなぁ……）
　ここはドラマやアニメの世界じゃないんだから、そう簡単に気持ちの変化なんて起こらない。
（今は奉仕部のほうをどうにかしないといけないのに）
　告白されてるのに、何を言っているの？このリア充め！
　友達に相談すると間違いなくこう帰ってくることが予想できるので、私はますます頭を悩ませていた。
＊＊＊
　二年の教室にて。
「ちくしょー！だめだった」
「あの一年生に告白してきたのか？大岡」
「ああ。結局は断られたけどな」
「あの子、まじぱないわー！噂では上級生からも告白されたみたいだ

わー」
「まじかよ……」
「誰とも付き合うつもりはありませんって断り続けてるみたいだけどな」
「だけど、あの様子だと本当に付き合うつもりはなさそうだな」
「隼人君もそうおもうん？」
「断り続けるということはそういうことなんだろうな」
　彼女は奉仕部にいると聞く。いずれはあの３人との関わりを深くしていくことだろうな。

病院

その日の帰り道。私は通院のため病院によっていた。
子供のころから通いなれた病院のため、そこに勤務している看護士さんや介護士さんとはすっかり顔見知りの関係になっていた。
主に通院の内容は発声練習と簡単な治療だった。
そして今日もいつもどおりの練習を終えた後、私は先生と少しだけ話をすることになった。
「どうだい？学校のほうは？」
（楽しいですよ。皆、いい人たちですし）
この先生とは私が病気になってから、私の治療担当となっている先生だった。
「それならよかった。美波ちゃんが最近元気がないと親御さんから聞いてたからね」
（ちょっといろいろありまして…）
さすがに部活のことで少し落ち込んでますとはいえない。
個人のプライベートの問題だし、他人に頼ってどうにかしようとも思わないから。
「何があったかは話してくれないんだろ？」
（さすが。私の性格をよく理解してらっしゃる）
「美波ちゃんがそういう子って言うのは、今までやってきて充分理解してるよ」
付き合いが長いと人のことを理解できると聞くが、どうやらそれは事実だったらしい。
「美波ちゃんはいつも何かを我慢してる。気持ちを伝えるのが下手糞といっているが、そうじゃないと僕は思うけどな」
（そうですかね？）
「ああ。何か遠慮してる。自分の本心を伝えることでそれまでの物が壊れてしまう。だから自分の中で必死に隠してる」
先生は当たりだろ？と聞いてきた。
（あたりですよ。先生にはかないません）

正直にいうとあたりでもなく、はずれでもない。それでも、私の中では正解に近かったので、参りましたと両手を軽く挙げた。
「もっと自分の気持ちに正直になってもいいと思うけどな」
(どうもそれができないんですよね。どうしても抵抗してしまうというか……)
私の中では気持ちがぶつかるときが多い。
ここはこういったほうがいい。でも、こういったら相手を傷つけてしまう。だから違う言い方でそれを回避する。その方程式を頭の中でめぐらせている。
「抵抗ってことは気持ちをごまかし続けてるってことだろ?それってつらくないか?」
(あまり実感はないですけど、そうかもしれませんね)
よく話した後に疲れていることがあるので、もしかしたらそういった部分があるのかもしれない。
「だからもっとわがままになっていいと思う。今まで我慢してた思いをもっと開放してみたらどうだ?」
(難しそうですね)
「美波ちゃんならそれくらい簡単だろ?」
この先生は私のことをよく知っている。だから難しい課題を与えても必ずできるという信頼を向けている。
(先生にそういわれたら改善するしかないですね)
「僕にじゃなく、自分で思うようにしようね。やらされてるんじゃなくて、自分からやるという気持ちをもつようにね」
そう念を押さなくてもわかってますよ。
(わかりました。それにしても先生は医療の現場より、教育の現場を目指したほうがいいですよ)
「そうか?」
(はい。もう言い方や仕草が学校の先生ですもん。こんな医療の現場じゃなくて、教育の現場のほうがいきいきしてそうです)
この先生は学校の先生のほうが向いている。数年前から私はそう感じていた。

医療の現場でやるのもこの人にとっては天職かもしれない。
ただこの人の姿勢や考え方やこういった医療ではなく、生徒を影から見守る優しい先生といったものを感じていたからだ。
「そうだな。美波ちゃんの病気を治したら、そういった道に進むことも考えるよ」
（変なフラグを立てないでくださいよ。直らないフラグを立てるのは禁則ですからね）
「そんなフラグは立てないさ」
いや、地味にたってますよ。そして真顔で言うのはやめてほしい。こっちからしたら、マジで怖いから
（先生の腕とこの国の医学に期待してますとだけいっておきますね）
私の声はいつ戻るかわからない、それでもいつか話せるようになりたい。
＊＊＊
そして美波が帰った後の病院にて。
僕は担当の山中　美波ちゃんの検査を終え、一息ついていた。
「ふぅ…」
まったくあの子は不思議な子だ。落ち込んでいると思いきや、軽口をたたく元気はある。
「もう少し自由にやっていいと思うのにな」
美波ちゃんは周りのことはよく見えてるのに、自分のことはあまり見えてない。
前に自分にはいいところが何もないと言っていたが、僕はそう思わない。
「僕が言うのもありだけど、本人に直接気づかせたほうがましか」
そのことを僕が指摘しても、美波ちゃんはいい方向に受け取りはしないだろう。
そのことによって、今以上に気を使われるかもしれない。
「それにしても、あの子の病気はなんでよくならないんだ……」
子供のときから美波ちゃんを見てきたが、症状がよくなる傾向が見られない。

悪化しているということはないが、もしかしたらほかの病気の可能性も考えなければならない。
「一度検査入院させてみるか……」
今のままの週一回の通院だけではどうしても検査の時間が限られる。
検査入院という方法を使えば、充分に時間も取れるし、ほかの病気という可能性も模索できる。
「一度親御さんに相談してみるか」
このままじりじりと時間だけが進めば、きっと本人の心が持たなくなる。
美波ちゃんをずっと見てきた僕としてはそれだけは避けたかった。

料理

日々の暑さは本格差を増し、ＴＶの朝のニュースでは連日の猛暑のことを伝えていた。
そんななか、私は由比ヶ浜先輩と共に家庭科室にいる。その理由は一つ。料理の勉強のためだ。
（由比ヶ浜先輩、隠し味を入れたらおいしくなるっていう考え方はやめましょう…）
「ううっ……」
目の前には焦げたクッキーが置いてある。見た目もそうだが、味も最悪だった。
途中までは完璧だったんだ。ただ、最後の仕上げで何を思ったのか、由比ヶ浜先輩がとんでもないものを隠し味に使ったんだ。
（何でブラックコーヒーの粉をいれますかね……）
「だって味がマイルドになると思って」
（なりません）
由比ヶ浜先輩いわく、カレーにりんごを入れるような形らしいのだが、いくらなんでもクッキーにそれを入れたらまずい。
「ごめんね。こんなことに付き合ってもらっちゃって」
（別にいいですよ）
私は目の前のクッキー（木炭）をゴミ袋にいれた。
（今日はこのくらいにしましょう）
「わかった」
今の状態ではいくら練習してもだめなのはわかりきってる。
どうしたらうまくなるのか、どこを直せばいいのかを時間をかけて教えていけばいいと思うから。
「そういえば、この前の日曜日にゆきのんとヒッキーと一緒に私の誕生日プレゼントを買いにいってくれたんだよね。ありがとね」
（付き合っただけで、私は何も渡せてませんから。お礼を言われる理由はないですよ）
雪ノ下先輩と比企谷先輩はきっと何かを渡している。

一方の私は何も渡せてない。プレゼントは買ったのだが、どう渡していいのかわからなかったからだ。
「それだけでも充分うれしいから」
（そうですか）
この先輩はどうしてこんなにも優しいのだろうか。私が逆の立場だったらこうは思わないのに。
そして、片づけが終わった後、私たちは家庭科室を出た。
「おや、こんなところにいたのかね」
私たちが家庭科室を出ると平塚先生と遭遇した。
「何かあったんですか？」
「夏休み中の奉仕部の活動について話をしにいこうと、部室に顔を出したんだが、だれもいなかったからな」
今日の部活は雪ノ下先輩が用事があるということでお休み。比企谷先輩は早々に下校し、特にやることにない私はこうやって由比ヶ浜先輩の料理の特訓に付き合っていたということだ。
「どんなことをやるんですか？」
「合宿をしようと考えてる」
合宿となると泊まりか……うちの親は絶対に認めそうにない。
（それって絶対参加しないとだめですかね？私の親は多分認めないと思うので）
「そうなの？」
（うちの親は私の外泊は認めてないので。部活の合宿だっていっても、認めないと思います）
一般の家庭からするとどれだけ過保護だよと思われるかもしれない。
うちの場合は私がしゃべれないのもあり、そういうことは基本禁止というルールをつくったらしい。
「そうか。親御さんがだめと言うなら、いかせるわけにはいかないな」
平塚先生は残念そうに肩を落としていた。
「私は大丈夫ですよ。多分ゆきのんも」
「そうか。後はあのひねくれ者だがどうやって声をかけるか…」

雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩はいくらしい。
「そう不安そうな顔をするな。山中にも部の活動として別のことをやってもらう」
（具体的にはどんなことを？）
「それはこれから考える」
どんな内容までは決まってないんだな。まぁ、断られるなんて予想もしてなかったことだろうからしょうがないとは思うけど。
「じゃあ頼んだぞ。由比ヶ浜、山中」
そういって平塚先生は職員室に向かっていった。
「この後なんだけど、美波ちゃんって時間ある？」
（ありますけど、どうかしましたか？）
「美波ちゃんって先月が誕生日だったんだよね？」
私の誕生日は６月３０日だ。でも、何でそれを知ってるんだろう。
（そうですけど…何で知ってるんですか？）
「メールアドレスに日付が書いているから、もしかしたら誕生日の日付なのかなって思ったんだけど、外れてる？」
ああ、そういうことか。
（いいえ、あたりです）
「じゃあ、お祝いしないとね。私のときもしてもらったし」
（でも、私は何もしてませんよ…）
何もしてないのに、お祝いなんかしてもらってもいいのだろうか……
「それでもプレゼントを買いにいってくれたんでしょ。そのお礼をしたいんだ。ゆきのんにも話はしてあるから」
（そういうことなら……）
由比ヶ浜先輩って意外に押しが強い。あんな小動物の目で頼まれたら断れない。
もしかしたら雪ノ下先輩は普段由比ヶ浜先輩と接するときはこう思っているのかもしれないと私は思った。

逃げ道を作っていた私

誕生日会をするにあたっては準備しなくてはならないものが二つある。

一つは人が来ることを肯定した飲み物やお菓子の類。

主賓の好みに合ったものを集めることは勿論だが、大勢の人が来たときのためのストックをある程度用意しておく必要がある。

そして二つ目は場所だ。

カラオケボックスや騒いでも人に迷惑をかけない場所が一番最適だが、私たちのような高校生は夜遅くまでいられない。

そして夏休みが近づいているということでどこのカラオケボックスも帰宅途中の学生で込んでいることが予想できる。

（以上二つのことをクリアする必要があると私は思うのですよ）

学校から出て、まずは飲み物を買うため近くのスーパーに向かう道のりの中、私はこの前ネットで見つけたことを話していた。

「そんなことどうやって知ったの？」

（グーグル先生やまとめサイトを調べれば乗ってます。もっとも、今の私の考えはその中の一部の人の考えを自分なりにまとめた結果ですけどね）

由比ヶ浜先輩はへぇーといっているが、あまり興味はなさそうだ。

「場所だけど、どうしようっか？」

（考えてないんですか？）

「ごめんね。もしかしたら断られるかもって思ったから……」

（別に断りませんよ）

さすがにその話を結構ですと断るのは悪い気がする。

「そう？最近の美波ちゃんは明らかに私たちを避けてるように見えたし、部活に来ても話さずに読書に集中しているかんじだったもん」

由比ヶ浜先輩の言葉を聞いて、最近の私はほんと最悪すぎると実感させられる。

（ごめんなさい。最近は考え事をしていることが多かったので）

「考え事ってたとえばどんなこと？」

（私のできることって何なのかなって。私って不器用すぎるし、いても迷惑になるだけだし、何もできないんじゃないかなって……）
ハルからはできることを探せばいいと言われたが、こんな私にできることなんてあるのだろうか。
「できることならあるじゃん」
（どんなことですか？）
「ほら。今日あたしに料理を教えてくれたじゃん」
（でも、すごく小さなことですよ）
「でもその小さなことでも教わっている人からするとすごく嬉しい。駄目な所を教えてくれるから真剣にやってるんだなっていうのも伝わってきたし」
小さなことでも人に感謝されるとやっぱり嬉しい。
私は料理が得意だ。今日も由比ヶ浜先輩に教えてと頼まれてもいやな気持ちはしなかったし、失敗続きだったけど教えてる最中はとても楽しかった。
（小さいころでも感謝されると嬉しいですね）
「そうだよ。それに美波ちゃんは物事を深く考えすぎな気がする。もう少し楽に考えたらいいと思うよ」
私ってそんなに堅物なのだろうか……最近よく言われるから普段の自分の行動をもう少し見直したほうがいいかもしれない。
（そうですね。もう少しフラットにしてみます）
私はそう思うと考えるのを一度やめた。
「私たちの間にも見えない壁もあるのを感じてたし、もっと近くに来てほしいな」
（壁ですか？）
「うん。心の壁というか、私たちと仲良くなるのを避けているそんな感じかな」
（それはきついですね……）
いつの間にそんな壁を作っていたんだろう。でも、思い当たる場面はある。
田上さんと会ったときだ。あのときにいわれた言葉をずっと気に

して、それで私とこの人たちは違うと思い込んで、知らないうちに壁を作っていたんだ。
「うん。仲良くなるためにはやっとお互いが理解しないといけないと思うし、それにその人が近くに来ないとそれもできないと思うから」
（そうですね）
多分私はいろいろなことを言い訳にして、ずっと逃げてたんだと思う。
人が仲良くなるのは簡単なのに、ずっとそのことを言い訳にして逃げてた。
相手が分かり合おうといるのに、自分からそれを拒否して、逃亡していた。
（もしかして誕生日会もそれをきっかけにしようと？）
「うん。先読みされちゃったけどね」
言葉なんて要らなくても人は通じることはできる。街中やニュースでそんな話をよく耳にする。
私のような弱い人たちが一般の人たちと仲良くする場面をよく目にする。
私と同じ施設に通っている子の中にも親友がいるという子もいる。
その人たちで共通していることが人との大事にしているということだ。
私ももう逃げるのはやめよう。未来や自分のことを言い訳にするのはもうやめよう。
だって、こんなに楽しいと思える日常を送れているんだ。そんな小さなことでいつまでもうじうじとしていてもしょうがない。
（全く、もう少し考えてください。場所とか日にちとかサプライズならサプライズで、あらかじめケーキを買っておくとか。事前準備を終えてから誘ってください）
「うっ……駄目だしばっかり」
そう決意すると、堅く閉ざされた氷が解けたように、本来の自分を取り戻し始めた。
（当然です。穴だらけなんですから）

穴だらけの誕生日会。まるで少し前の政党のようにたたけばほこりが出てきそうだ。
「しかも、何で私だけにいうの!?」
（だって企画したの由比ヶ浜先輩ですよね？それにここには由比ヶ浜先輩しかいませんから）
「それは私だけど……」
（なら指摘されても文句は言えませんよね）
「そこでさらっとほほえまないで!?怖いよ!?」
（私と分かり合うには3年はかかりそうですね。あ。その前に卒業してましたね。残念です）
「卒業しても交流すればいいじゃん！」
（留年っていう手もありますよ？そうすれば私と一緒に卒業できます）
「それだけは嫌ー！」
頭を抱えている由比ヶ浜先輩を見て私は小さく笑った。
なお、その後はきちんと誕生日会の日付を決め、会場（私の家だったが）の用意。ケーキや料理の支度をし、中学時代の友達や施設の友達を招いての誕生日会を開いた。
自分の誕生日なのに、自分ですべてやるというなんとも複雑な形で雪ノ下先輩はそれを聞いては大変だったのねとねぎらってくれた。
なんかぐだぐだの形のパーティーとなったが、それまでに大切なことに気づくことができ、少しずつ本来の自分を取り戻しつつあったので、私にとって今年の誕生日会は決して忘れないだろうと思った。

雪ノ下さん

夏休みに入り、各自の生徒がそれぞれのすごし方で満喫しているころ。

私は学校に登校していた。理由は勿論。夏休み中の奉仕部の活動だからだ。

「ごめんねー。夏休みなのにきてもらって」

（いいえ。どうせ宿題をやるしかなかったので）

この学校の生徒会長である城廻先輩が申し訳なさそうに私に言った。

平塚先生が考えた私の奉仕部の活動は生徒会の手伝いだった。

夏休みということで人がおらず、いろいろとたまっているものがあるらしく、生徒会に人手が必要となったらしい。

主に事務作業をするみたいで、ある程度のパソコンを使える私が召集されたということだ。

「宿題はどれくらい終わったの？」

（半分は終わりました。このままのペースでいくと８月の頭には終わるかと）

「早いねー。私なんてまだぜんぜんだよ」

城廻先輩と私では立場が違う。私は一年生なので、のんびりとやれるが城廻先輩は受験生ということもあり、宿題もやりながら受験勉強もしなければならない。

（受験生って大変そうですね）

「山中さんだって昨年は同じ立場だったでしょ？」

（私のところは少なかったので楽でした）

「そうなんだ。少なかったらくだよね」

もっとも、毎年宿題を見せてーと泣きついてくる友達がいたんだけどね。

「山中さんみたいな子が生徒会に入ってくれると頼もしいんだけどなぁ」

（私には無理ですよ。性格的にも向いてませんから）

「絶対にできそうな感じはするんだけどね」
　そこまで期待をかけられても困る。私はそこまで有能な人材ではないのだから。
（さすがに無理ですよ。プレッシャーとストレスでつぶれそう……）
「山中さんもストレスを感じることがあるの？」
（そりゃありますよ。私だって人間ですから）
　むしろこの世の中を生きている人間でストレスを感じない人はいないだろう。
「そういう時ってどうやって発散するの？」
（好きなことに没頭することですね）
「どんなことに？」
（ピアノをずっと弾いてるんですよ。一人で2時間とか。そうすることでかなりすっとします）
「ピアノはすきなの？」
（好きです。もう自分の体といっても過言はないです）
　子供のころからずっとピアノを引き続けた。それは言葉を失っても変わらない。
「それでよく音楽室を借りているんだね」
（すみません……迷惑でしたかね）
「ううん。すごくうまいし、聞いてて心が引き寄せられるから。それに吹奏部や演奏部からも苦情は来てないし、むしろ教わりたいし、山中さんが弾いているところを生で見たいって前に聞いたよ」
　そんなに絶賛されてるんだ……今日は時間があるし、後で借りようと思って、楽譜持って来てるし、弾いてみようかな。
（後で弾きましょうか？）
「いいの？」
（どうせ借りるつもりでしたから）
「ありがとう！じゃあ早めにこれを終わらせないとね」
（はい）
　私たちは作業のスピードを速めた。
　そして、今日の作業は終わり、音楽室に移動したのだが。

「楽しみだねー美波ちゃんの演奏」
「陽さん…いつきたんですか？」
「さっきだよ。今日、めぐりがいるって聞いたから、顔を出そうと思ってきたんだけど、んかその子が演奏するってみたいだから。私も聞きたいなーって思って」
　それを知っているってことは、さっきの会話を聞かれたってことかな。
「前に一度あってるから知ってると思うけど、自己紹介するね。私は雪ノ下　陽乃。雪乃ちゃんの姉でーす」
（どうも……私のことは知ってますよね？）
「うん。悠ちゃんからよく聞いてるからね。山中　美波ちゃん」
　普段あの人はどんなことを話しているんだろう。
　一度事情聴取しなければならない。
　私はそう思いつつ、楽譜をセットし、小さく深呼吸した。
「楽しみだね」
「そうですね」
　若干緊張している私を気にすることなく、城廻先輩と雪ノ下さんは談笑していた。
（じゃあ、いきます……）
　私はいつものようにピアノをかなではじめる。初めのころの緊張はどこに言ったのか少したつことにはそんなことを忘れていた。
「やっぱりすごい……」
「こんなすごい才能があるのね……」
　途中で二人が何か言っているように見えたが、私は気にすることなく演奏に集中した。
　そして持ってきた2曲を弾き終わると、城廻先輩と雪ノ下さんは拍手をしてくれた。
（あ、ありがとうございます…）
　拍手をされたことで恥ずかしくなったのか、私の顔は真っ赤になっていた。
「すごかった。音楽の道に進んだほうがいいんじゃないかと思ったも

ん」
「そうですよね。高校生であれだけの演奏をできる人はいないです」
二人からは絶賛の嵐だった。そこまでほめられると少し照れる。
「ありがとね。いい演奏だったよ」
(どういたしまして。今のもいつもどおりにやった姿なので)
「謙虚だねぇ。うん。少し気に入ったかも」
雪ノ下さんはそういって私に携帯の番号を書かれた用紙を手渡してきた。
「私の携帯とメルアド。何かあったら連絡するねー」
(え、あの…)
「じゃあ、めぐり、美波ちゃん。また今度ねー」
そういって雪ノ下さんは音楽室を出て行った。
(なんか嵐のような人でしたね…)
「そうだね。でも悪い人じゃないから」
雪ノ下さんの様子に城廻先輩は苦笑しながら、答えていた。